作者

太宰治

明治四十二（一九〇九）年～昭和二十三（一九四八）年。小説家。本名・津島修治。青森県北津軽郡金木村（現・五所川原市）で父・源右衛門、母・夕子（たね）の第十子六男として生まれる。津島家は県内屈指の素封家で、源右衛門は県会議員、衆議院議員、貴族院議員をつとめた人物であった。大正十二（一九二三）年、青森中学校に入学。昭和二（一九二七）年に弘前高等学校に進学、芥川の死に衝撃を受けて生活が変化し、小山初代（紅子）とも親しくなる。昭和五（一九三〇）年、東京帝国大学に進み、井伏鱒二に師事。その一方で非合法活動にも参加。同年、銀座のカフェーの女給田辺あつみ（田部シメ子）と知り合い、鎌倉腰越町の海岸で心中をはかりあつみが死亡。十（一九三五）年には大学落第が決定、新聞社の入社試験にも失敗し、鎌倉で縊死を図るが未遂に終わる。同年、腹膜炎の鎮静に医師が用いたパビナールがもとで翌（一九三六）年には中毒状態に陥り入院。十二（一九三七）年、入院中に起きた初代の過失を知り、群馬県水上の谷川岳で初代と心中を図るが未遂。初代と離別後、十三（一九三八）年に井伏が滞在する山梨県御坂峠に滞在し、翌（一九三九）年石原美知子と結婚。同年九月に東京府三鷹村下連雀に移転、創作に邁進した。二十（一九四五）年には青森の生家に疎開。翌（一九四六）年、三鷹に戻り、流行作家として原稿に追われた。二十二（一九四七）年には下曽我に住む太田静子を訪ねた。昭和二十三（一九四八）年六月、玉川上水に山崎富栄と入水。三十九歳で死去。

文学活動

太宰の文学活動を語るうえで欠かせない小説は数多くあるが、初期の「逆行」（昭十）もその一つである。「逆行」は昭和十（一九三五）年の第一回芥川賞候補作となるも、受賞は石川達三の「蒼氓」に決定した。この第一回芥川賞発表の後、銓衡委員の一人である川端康成が「文藝春秋」（昭十・九）の「芥川龍之介賞経緯」に綴った「道化の華」評に太宰が激昂、反駁文「川端康成へ」（「文藝通信」昭十・十）を発表し、さらに川端が同誌十一月号に「太宰治氏へ芥川賞に就て」を発表して、二人の応酬はのちに〈芥川賞事件〉（芥川賞騒動）と呼ばれるようになる。十一（一九三六）年には「逆行」や「道化の華」等を収録した第一創作集「晩年」を刊行。十二（一九三七）年、最初の女性独白体小説「燈籠」を発表、この手法は太宰文学の特徴の一つとなる。十四（一九三九）年には「富嶽百景」「続、富嶽百景」を発表、妻・美知子による口述筆記でまとめられた「黄金風景」（上、下）が発表されたのもこの年である。さらに、愛読者有明淑の日記をもとに「女生徒」も発表、川端康成から絶賛された。十五（一九四〇）年には「駈込み訴へ」や「走れメロス」を発表し順調に創作を続けた。十七（一九四二）年には前（一九四一）年十二月八日をモチーフにした「新郎」、「十二月八日」を発表。十九（一九四四）年には子守の「たけ」との再会をモチーフにした「津軽」を刊行し旺盛な創作意欲を見せた。疎開先の青森の生家から三鷹に戻ってからは流行作家として多忙な日々を送り、詩人の妻による視点で紡がれた「ヴィヨンの妻」（昭二十二）、没落貴族の娘を主人公とする「斜陽」（同）を発表、二十三（一九四八）年には、「如是我聞」や、「人間失格」

を発表した。

作者を解くカギ

太宰治というと、小説に〈太宰治〉を彷彿とさせる人物を登場させ、文壇や読者に向けて自らのイメージを戦略的に作り上げた作家というイメージが強いが、その一方で今回の「待つ」のような女性独白体小説も十六篇発表した。なかでも「女生徒」(昭十四)は、〈芥川賞事件〉で応酬した川端康成が絶賛したことで知られている。この川端による評は、「女生徒」のほか「懶惰の歌留多」(昭十四)についても述べていて実際はかなり長文だが、特に有名なのは、次の部分である。

「女生徒」のやうな作品に出会へることは、時評家の偶然の幸運なのである。そのために、讃辞が或ひは多少の誇張にわたるのは、文学を愛する者の当然の心事である。(略)この女生徒は可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴でもあるだらう。女の精神的なものについて、大凡失望することの多い私は、この「女生徒」程の心の娘も現実にはなかなか見つからないのを知るのである。(川端康成「文芸時評―小説と批評」「文芸春秋」昭十四・五)

加えて、この評の中で川端は「「月下の老人が『人になりたや』酔ひもせず。」と、太宰氏は私にくれた「晩年」の扉に書いてゐる。早熟の才質の疲労の影が見える」「太宰氏のやうな青春は、ただでさへ傷つきやすく、殊に日本では育ちにくい」(前掲)と太宰の過去に寄り添おうとしている。先述の通り、かつて〈芥川賞事件〉の発端となったのが、川端の「道化の華」(のちに「晩年」に収録された)に対する「作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあつた」(「芥川龍之介賞経緯」「文芸春秋」昭十・九)という評であったことを考えれば、「女生徒」評からは〈芥川賞事件〉からの緩やかな和解という面も読み込むことができよう。それだけ川端にとって「女生徒」は魅力的な小説であったのだ。しかし、「女生徒」と、そのもととなった女性の日記(「資料集第一輯　有明淑の日記」青森県近代文学館　平十二)を比べると、太宰が日記にあった「大人らしい考察」を捨て「〈少女らしさ〉」(小平麻衣子「〈研究へのいざない〉太宰治「女生徒」を読む」「語文」平二十四・六)を作り上げたことは見逃せない。

今回、「待つ」においては「私」の心的葛藤や時代状況との関わりを中心に考察しているが、女性独白体小説全体を読んでみると、太宰という作家が〈女性〉をいかに作り上げようとしたのかという面も見えてくるだろう。

出典

本文は「太宰治全集6」(筑摩書房　平成十)によった。

「待つ」は昭和十七(一九四二)年三月の「京都帝国大学新聞」に掲載予定であったが、時局にふさわしくないという理由で掲載されず、その後、創作集「女性」(博文館　昭和十七)に収録された小説である。太宰が博文館出版部の石光葆に宛てた書簡(昭和十七年二月二十日付、「太宰治全集」第十二巻　筑摩書房　平十一)によると、当初「待つ」を収録する予定はなかったが、校正段階で「女性」の末尾に「待つ」を入れるよう依頼していることがわかる。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「　」→「（十七年一月）」（原文P三八（末尾）、教科書P二一三・15）〔教育上の配慮（初出に拠る）〕

参考文献

＊教師用

○回想・事典・評伝・年譜など

「別冊國文學改装版　太宰治事典」東郷克美編　學燈社　平七

＊全作品のほか、作中人物やキーワード等についても事典形式でまとめられている。

「太宰治全作品研究事典」神谷忠孝・安藤宏編　勉誠社　平七

＊各作品の梗概や作品評価、研究展望がまとめられた事典。

「増補改訂版　回想の太宰治」津島美知子　人文書院　平九

＊太宰の妻による回想。「待つ」に関する記述がある。

「太宰治の年譜」山内祥史　大修館書店　平二十四

＊各作品の脱稿時期や発表年月などについても詳しく書かれている年譜。

○太宰治全般

「太宰治全集」全十三巻　太宰治　筑摩書房　平十～十一

＊小説、随想のほか、書簡、草稿、年譜、著作年表等も収録。「待つ」に関わる書簡も収録されている。

「「私」をつくる　近代小説の試み」安藤宏　岩波書店　平二十七

＊太宰だけではなく、夏目漱石や志賀直哉、川端康成らがいかに小説のなかに「私」を築き上げたのかを分析。近代小説に描かれる「私」と、「あなた」／「君」の関係についても論じている。

○「待つ」および関連作品について

「女性」〈名著初版本複刻太宰治文学館〉　太宰治　日本近代文学館　平四

＊昭和十七年に博文館より出版された創作集を日本近代文学館が復刻。収録された作品は全て女性独白体小説である。「十二月八日」を冒頭に、「待つ」を末尾に収録。

「太宰治「待つ」論―「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」（「大妻国文」所収）井原あや　平十五・三

＊当時の『京都帝国大学新聞』の紙面の有様を追い、「待つ」と他作家の掲載作との差などを確認したもの。

「詩人たち　ユリイカ抄」伊達得夫　平凡社　平十七

＊「京都帝国大学新聞」編集委員でのちに出版社「書肆ユリイカ」創業者となった伊達の回想録。「発禁の思い出」で「待つ」の原稿について述べている。

「太宰治「待つ」覚書き」（「キリスト教文学」所収）　田中良彦　平二十四・八

＊当時の雑誌記事で用いられる「待つ」という言葉が持つ意味を丁寧に追い「大戦争」に揺さぶられる「私」の葛藤を論じている。注において伊達得夫による「発禁の思い出」（前掲「詩人たち　ユリイカ抄」）についても言及している。太宰の書簡にある真杉静枝「妻」との関連も

述べている。

「太宰治と戦争」内海紀子・小澤純・平浩一編　ひつじ書房　令元

＊太宰と戦争の時代の関わりを示した一冊。

「太宰治「待つ」論―成立の背景から見えてくるもの―」

（「学習院大学国語国文学会誌」所収）玉田琴乃　令二・三

＊伊達得夫の「発禁の思い出」（前掲「詩人たち　ユリイカ抄」）をふまえ、現行の「待つ」とは異なる物語が存在した可能性を指摘。

＊生徒用

○「待つ」及び関連作品について

「太宰治　弱さを演じるということ」安藤宏　筑摩書房　平十四

＊太宰の小説に描かれる〈不安〉や〈恐怖〉に読者が共感（共鳴）する仕組み等を論じた書。

「女生徒」太宰治　角川書店　平二十一

＊太宰の女性独白体小説の嚆矢である「燈籠」から戦後の「饗応夫人」まで、十四篇の女性独白体小説を収録。

「コレクション　戦争と文学」全二十巻・別巻一　集英社　平二十三～二十五

＊作家たちが戦争をどのように描いてきたのか、どのように向き合ったのか、様々な切り口で構成されたアンソロジー。第八巻には「待つ」も収録されている。